地域研究の学術的知見を活用した高校台湾修学旅行支援の研究

Research of supporting high school trip to Taiwan utilizing academic knowledge of area studies

赤松 美和子[1]
[1]大妻女子大学比較文化学部

Miwako Akamatsu[1]
[1]Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：台湾，修学旅行，地域研究，教材開発
Key words：Taiwan, School trip, Area studies, Development of educational materials

抄録

近年，修学旅行先を海外とする高校が増えている．台湾を修学旅行先に選ぶ高校は急増しており，2014年度以降，海外修学旅行先として台湾は連続1位となっている．2018年には，海外旅行全参加者数168,881人中，57,540人が台湾へ赴いた．だが，台湾を学ぶための教材は十分に用意されていない．本研究計画では，地域研究としての台湾研究が蓄積してきた学術的知見を，学校現場に活用し，修学旅行を各教科とも関連付けた学びとするために補完的な役割を果たすべく，台湾修学旅行の事前事後学習用の，有用性，利便性の高い教材を開発する．2019年度は，教材開発の準備のため，聞き取り調査，および「台湾地域研究と修学旅行」連続公開講座を行った．2020年度には，本研究の成果を基に，三つのオンライン教材を開発するなど，展開中である．

１．研究目的

2020 年は新型コロナウイルス感染症の流行により，修学旅行どころではない．修学旅行の意義や形式についても再考の機会となることが予想される．だが，2019 年以前をみてみると，修学旅行先を海外とする高校は増加傾向にある．特に台湾を修学旅行先に選ぶ高校は急増しており，2014 年度以降，海外修学旅行先として台湾は連続 1 位となっている．修学旅行という形で海外経験を積むのは教育上非常に貴重な経験である．しかし，その海外修学旅行のための教材はこれまで十分に用意されていない．それは台湾関連も同様である．

2022 年度実施予定の高校学習指導要領では,「歴史総合」が新科目として加わり，すべての高校生が同科目で「日本と世界の近現代史」を学ぶことになる．台湾は，特に近現代において，日本との交流が深い．そこで，本研究では，地域研究としての台湾研究が蓄積してきた学術的知見を，学校現場に活用し，修学旅行を各教科とも関連付けた学びとするために補完的な役割を果たすべく，台湾修学旅行の事前事後学習用の，有用性，利便性の高い教材を開発する．さらに，地域研究から教科教育学への架橋を目指す先駆的な実践的研究の実例としたい．

２．現状分析

2.1.　台湾修学旅行の現状

全国修学旅行研究協会「2018（平成 30）年度全国公私立高等学校海外（国内）修学旅行･海外研修実施状況調査報告」によれば，2018 年度の修学旅行対象学年生徒数は 108 万 4000 人，うち海外旅行全参加者数は 168,881 人である．トップ 5 は以下の表 1 の通りである．

表 1．2018 年度「訪問国別　実施校数と参加生徒数(延べ数)」ベスト 5

	訪問国（地域）	実施校数	参加生徒数
1	台湾	357 校	57,540 人
2	シンガポール	202 校	28,295 人
3	オーストラリア	126 校	19,430 人
4	マレーシア	123 校	17,143 人
5	ハワイ	93 校	12,531 人

全国修学旅行研究協会「2018（平成 30）年度全国

公私立高等学校海外（国内）修学旅行･海外研修実施状況調査報告」をもとに筆者が作成.

台湾を修学旅行先に選んだ高校は 357 校，参加生徒数は 57,540 人であり高校海外修学旅行の実施校数，参加生徒数ともに 1 位となっている．海外修学旅行の 3 分の 1 以上が台湾に赴いている．つまり，高校生全員の約 5%が台湾に修学旅行に参加している計算になる.

にもかかわらず, 大手旅行会社に台湾修学旅行の現状について聞き取り調査に行ったところ, 専門的な事前指導をできる人材も教材も乏しく, やむを得ず旅行会社の社員が事前指導を行っていることさえあるとの指摘であった.

2.2.　教科書における日本統治期記載をめぐる台湾と日本の差異

台湾修学旅行では，ほとんどの高校が現地の高校を訪れ，学校交流を行う．こうした実情を踏まえ，日本と台湾の歴史教科書における両国，とりわけ日本統治期の記述内容の差異を確認しておきたい.

日本の高校の歴史教科書の一つ, 山川出版社『詳説日本史』(2015) の本文で言及された台湾関連記述は 7 箇所に過ぎない．うち，日本統治と関係する部分は，①下関条約による台湾・澎湖諸島の割譲，②樺山資紀を台湾総督に任命，③鈴木商店破綻により不良債権を抱えた台湾銀行を救済できず若槻内閣総辞職, ④皇民化政策, 以上 4 点である. これでは高校生の知識不足はもとより，教員側が教材研究を深めようにも教育資源が足りない状況であることが予想される.

中学の歴史教科書も確認しておく. 帝国書院『社会科　中学生の歴史　日本の歩みと世界の動き』（2020）において，本文で言及された台湾関連の記述は 7 箇所, うち, 日本統治期に関する記述は, ①下関条約による台湾・澎湖列島の割譲，②台湾総督府設置，植民地支配の開始，③台湾では 1920 年代から議会の設置と自治を求める運動が行われた，④皇民化政策，以上の 4 点である．②には「台湾の植民地化と近代化」（179 頁）というコラムが掲載されており,「台湾に烏山頭ダムをつくった八田與一（1886-1942）の墓と像」と題し「八田は新しい工事の方法や機械を取り入れるなどして，10 年の歳月をかけて台湾に烏山頭ダムをつくりました．当時，ほとんど作物をつくることができなかった平原も，烏山頭ダムの完成よって，台湾一の穀倉地帯に生まれ変わりました」と，写真入りで八田與一が丁寧に紹介されている．数少ない植民地台湾に関する記述の中で，最大に紙幅が割かれたのが八田與一についてであり非常に際立っている.

一方，台湾の普通高校必修科目歴史の教科書の翻訳版である薛化元主編 永山英樹訳『詳説　台湾の歴史―台湾高校歴史教科書―』（雄山閣，2020 年）では，本文 225 頁中，日本統治期に関する紙幅は，108 頁から 163 頁までの 56 頁，全体の約 4 分の 1 におよぶ．日本の教科書と比較した場合，圧倒的に多い．にもかかわらず，日本の中学の教科書でフォーカスされていた八田與一に関わる記述は,「民生インフラ建設」の水利に関して,「総督府は灌漑用水路の管理を強化し，その後更に官設の計画を立て, 北部の桃園大圳を含む 14 の用水路の工事を補助した」（122 頁）に続く,「最も重要とされたのが，八田与一（Hatta Yoichi, 1886-1942）が設計した嘉南大圳の工事だ．1920 年に起工して曽文渓と濁水渓から水を引き，1930 年には烏山頭ダムを完成させ，嘉南平原の灌漑の水源問題を解決した」（122 頁）という簡潔な説明にとどまり，写真は掲載されていない．日本の教科書では，八田與一が主語として語られているのに対し，台湾の教科書では，総督府の事業の一例として紹介されている.

このように，日本の教科書における台湾統治に関する記載は少ない．のみならず，嘉南大圳の工事について，日本の中学校の教科書では，八田與一という個人を取り上げ，近代化の功績を強調しているのに対し，台湾では，総督府の事業の一例としての淡々とした説明のみがなされている．日本と台湾の教科書における日本統治期の記述は, 量, 内容ともに非対称であると言わざるを得ない.

こうした現状を鑑みても，日本の高校現場の負担を増やさない形で，日台の教科書の差異を考慮した教材が必要だと考えられる．また，2022 年度実施予定の高校学習指導要領では，新科目「歴史総合」が加わり，すべての高校生が同科目で「日本と世界の近現代史」を学ぶことになる．海外修学旅行に特化しつつも，現行の教科科目の学習活動と関連付け，さらに「歴史総合」に対しても実践的かつ有効な学びとして機能するような教材の

開発が望まれる．

３．研究成果

本計画において，2019 年度は，教材開発の準備のため，旅行会社，関連団体や高校教員などから聞き取り調査，および「台湾地域研究と修学旅行」連続公開講座を行った．詳細は以下の通りである．

第 1 回　2019 年 10 月 25 日（金）
連続公開講座開催にあたって　若林正丈（早稲田大学）
SNET 台湾の一年 赤松美和子（大妻女子大学）
台湾修学旅行の現状と課題―旅行大手五社の聞き取りから―　山﨑直也（帝京大学）
ケーススタディ①　建築から台湾修学旅行をデザインする　上水流久彦（県立広島大学）
司会　洪郁如（一橋大学）

第 2 回　2019 年 11 月 22 日（金）
ケーススタディ②　高校教師の経験から台湾修学旅行をデザインする　河原功（台湾協会）
ケーススタディ③　「八田與一」から台湾修学旅行をデザインする　胎中千鶴（目白大学）
司会　山﨑直也（帝京大学）

第 3 回　2019 年 12 月 20 日（金）
ケーススタディ④　ダイバーシティ教育の視点から台湾修学旅行をデザインする　橋本恭子（日本社会事業大学）
ケーススタディ⑤　国立台湾歴史博物館から台湾修学旅行をデザインする　洪郁如（一橋大学）
司会　赤松美和子（大妻女子大学）

高校教員，旅行関係者，台湾修学旅行に子どもを送り出す予定の保護者，台湾研究者，メディア関係者など合計 200 人以上が参集し意見を交換し合う有意義な場となった．

４．研究成果の発展

2019 年度の聞き取り調査により，高校現場においては，紙媒体の教材を生徒が購入することは困難であるということがわかった．また，新型コロナウイルス感染症の流行により，オンサイトでの活動が困難となった．

そこで，本研究成果の更なる発展を求め，2020 年度は，私も共同代表の一員である日本台湾修学旅行支援研究者ネットワーク(SNET 台湾)として，台北駐日経済文化代表処，同処文化センター，および台湾の教育部の助成を受け，以下の 3 種類のオンライン教材を開発した．

4.1.　台湾修学旅行アカデミー

YouTube 番組「台湾修学旅行アカデミー」は，各分野の台湾研究者を講師に招き，中高生の疑問に答える形で，台湾の複雑さを解きほぐし，台湾を考える楽しさをわかりやすく伝えたオンライン教材である．

各回の講師とテーマは，第 1 回が東京大学東洋文化研究所教授で日本台湾学会理事長の松田康博による「台湾とは何か？」．以下，第 2 回「台湾と国際社会」（福田円・法政大学），第 3 回「台湾の教育」（山﨑直也），第 4 回「台湾の選挙」（小笠原欣幸・東京外国語大学），第 5 回「台湾の経済」（川上桃子・アジア経済研究所），司会は筆者が務めた．

わかりやすさを追求しながら，本質的に重要な問題を論じるものであり，修学旅行の事前学習のみならず，大学の遠隔授業での使用をはじめ，より広い関心層の視聴も視野に入れて制作した．今回，新型コロナの影響で，撮影はスタジオではなく，すべて Zoom を使って行った．

初回配信は，8 月 23 日で一週間ごとに SNET 台湾チャンネルより順次公開した．約 2 か月を経て 10 月 15 日現在，全五回の合計再生数は 15,102 回である．

SNET 台湾チャンネルの URL，
https://www.youtube.com/channel/UCmtfk9gkQH-hiqUvXKDF4kQ.

4.2.　おうちで楽しもう台湾の博物館

YouTube 番組「おうちで楽しもう台湾の博物館」は，台湾の博物館が制作した動画に，日本語字幕や解説を付け，台湾の博物館を日本語話者に紹介するオンライン教材である．

紹介した博物館は，国立台湾博物館，国立故宮博物院，国家人権博物館，国立中正紀念堂，国立台湾史前文化博物館，国立台湾文学館，二二八国家紀念館，順益台湾原住民博物館，衛武衛国家芸術中心，国立台湾歴史博物館の 10 館である．

初回は 9 月 25 日，一週間毎に SNET 台湾チャン

ネルおよび台北駐日経済文化代表処の YouTube チャンネルより配信中であり，ナビゲーターを筆者が務めた．以下の写真（図 1）は，国立台湾博物館の解説のスクリーンショットある．

図 1.「おうちで楽しもう台湾の博物館」
第 1 回「国立台湾博物館」解説

4.3. みんなの台湾修学旅行ナビ

ウェブサイト「みんなの台湾修学旅行ナビ」は，台湾の地域研究の知見を活用した学習目的に基づく旅をデザインするためのオンライン教材である．

本サイトでは，台湾研究者や専門家が，台湾各地のスポットを，学習テーマに基づき紹介した．地域検索はもちろん，歴史・政治・人権・教育・産業・自然・環境・エネルギー・芸術・ジェンダー（LGBT を含む）・建築・宗教・文学・食文化・科学技術・民族・交通といった 16 の学習テーマおよび SDGs の目標からの検索も可能である．

また，学習テーマに基づいたモデルコースや，オンライン教材も紹介している．

台湾の教育部の助成により現在開発中で，12 月初旬に公開予定である．

4.4.　本助成による論稿の発表等

以上のように，本研究は，2019 年度の研究成果を基盤として，現在も発展中である．本助成によるその他の成果は以下の通りである．

①雑誌エッセイ

[1]「研究者による台湾修学旅行支援の試みーSNET 台湾と私の偶然ー」『多元文化交流』第 12 号，東海大学日本文学系（台湾），2020 年，9-19 頁．

②新聞エッセイ

[2]「台湾修学旅行, 研究者が支援」『毎日新聞』2019 年 12 月 5 日．

（受付日：2020 年 10 月 16 日，2020 年 10 月 26 日）

赤松　美和子（あかまつ　みわこ）
現職：大妻女子大学比較文化学部准教授

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了．博士（人文科学）取得．
専門は台湾文学．現在は，科研基盤(C) 20K00372「現代台湾文学・映画における LGBT 文化の影響―ジェンダー表象に注目して」を中心に研究を行っている．
主な著書：『台湾文学と文学キャンプ―読者と作家のインタラクティブな創造空間』（東方書店）